

岩田豊雄『海軍』の展開

田 中 励 儀

真珠湾攻撃特殊潜航艇の（九軍神）をテーマにした岩田豊雄（獅子文六）の小説『海軍』は、その事績発表からわずか四ヶ月後、昭和十七年七月一日から「朝日新聞」で連載が始まり、途中一日の休載をはさんで、十二月二十四日の第七十六回で完結する。この年の朝日文化賞を受賞。翌十八年二月五日、川端龍子の装幀で朝日新聞社から単行出版された。初版三万部、再版（昭18・3・10）五万部、三版（昭18・5・10）五万部、四版（昭18・7・1）五万部、五版（昭18・12・10）四万部と版を重ね、初年度だけで二十二万部が発行されるほどのベストセラーとなった。

三月には日本出版文化協会の推薦を受け、再版からは「推薦之辞」を記した帯が付されている。

本書は九軍神の一人横山少佐をモデルとした主人公の生立を通じて此の軍神を育んだ我が無敵の海軍魂の掘つて来る所の有形

無形の伝統と環境と組織とを描かうとした小説である。

時局を反映した文章ではあるが、作者自身、「題名が正直に示すが如く私は帝国海軍が書きたかったのであります」（原作者として）「初出未詳」というように、その要約は間違っていない。しかし、多くの戦意昂揚作品と異なるのは、「行届いた調査の上に立ちながら之を（略）消化し、その間決して不必要に大きなポーズをとることなく、然も十分に意を尽し所期の目的を達し得てゐる点」（「推薦之辞」、傍点引用者、以下同。）にある。

小説『海軍』が戦後も反故にならず、読み継がれているのは、^①主人公谷真人を神格化せず、同郷の親友牟田口隆夫やその妹エダとの交友をとおして、「劣等生ではなかつたが、優等生でもなかつた」（広い海へ、一）血のかよつた人物として描いているからであろう。本作の成立過程や作品評価、戦後版との本文異同等については、

旧稿を著したことがあるので、繰り返し返さない。本稿では、ベストセラー化した『海軍』のその後を、『海軍』余話』自筆原稿、少国民版『海軍』、映画脚本『海軍』などの紹介・分析をとおして、跡付きたい。

一

小説『海軍』が版を重ねる中で、岩田は日本海軍に関連した随筆を集めた『海軍随筆』（昭18・12・1初版二万部、昭19・5・1二刷二万部、新潮社）を刊行する。同書には、各地の海軍諸学校を訪ねた記録「土浦・霞ヶ浦」「海軍潜水学校」など五編のほか、「裸記」として十六の短文が収められている。前の五編は、戦後、岩田が「海軍報道部やジャーナリズムの依頼があったものばかりだが、私は甘んじてその依頼に応じた」（『海軍』その他について）「昭43・7」と述べるように、他動的な動機に基づく場合が多い。一方、後の「裸記」には、「横山少佐の手紙」「海軍の旅」をはじめ、「九柱の軍神を、全部書いてみたいほどの感激を受けた」（『小説『海軍』を書いた動機』初出未詳）岩田が、積極的に取材を重ねた小説『海軍』の成立に関わる文章が大半をしめる。

そのうち、よくまとまっているのは東京・鹿兒島・呉での取材の様子を記した『『海軍』余話』であろう。小説『海軍』の谷真人の

モデル・横山正治少佐の閲歴をめぐって、東京の岩田の自宅で親友肥後盛保から聞いた幼少時の話「西瓜」、郷里鹿兒島で中学の恩師尾上先生から聞いた軍人組の話「桜星会」、呉の水交社で同期生から聞いた海軍兵学校時代の逸話「軍神の話」など、十章から成る。この『『海軍』余話』は、『朝日新聞』昭和十八年一月一日〜十三日に、中村直人のカットを付して連載された^③。小説『海軍』の新聞連載終了からほぼ一週間後、早くもその「余話」が綴られるほど、作品の評判は高かった。単行本刊行を控えた時期にも当たり、近刊の宣伝も兼ねたことだろう。

『『海軍』余話』の自筆原稿が手元にあるので、以下に所見を報告したい。欄外に「岩田用紙」と記された四百字詰（二十字二十行）原稿用紙四十枚が、各章四枚づつにまとめられている。中央部でいったん切り離し、後で貼り合わされた原稿用紙も多い。本文は青色ペン書き。各章、章題の前に『海軍余話一』『海軍余話二』などと記されており、初出紙の連載表記と対応している。第八回以降は『海軍後記Ⅷ』『海軍後記Ⅸ』などと誤記された後、赤鉛筆で「後記」が「余話」と直されている。この回数表記は、『海軍随筆』収録時に削除される。署名は一貫して「岩田豊雄」。

活字の大きさを示す数字など、割付けを指示した他筆による朱書きがあるので、これを決定稿をみなして差し支えない。注目すべき

は、各回の一枚目に「要検閲至急」「検閲用至急」と大きく朱書きされていることである。事前検閲を受けるため、当局に提出されたものであつたらう。検閲の一例をあげる。横山少佐の自宅の勉強部屋には、「聖上が白雪に召された御写真と、キヨソネの描いた南洲翁肖像複製とが、楣間にか、つてゐた。」(屋根裏の部屋)と記された箇所欄外に、大きく「宮廷注意」と朱のゴム印が捺されている。その指摘を容れて岩田は、「御写真」を「御英姿」と訂正した。皇室や軍隊に対する過剰な配慮が要求された、窮屈な時代の空気が伝わってくる。

推敲段階で、章題の変更が四箇所ある。

- ・「軍神の片影」↓「軍神の話」(第二回)
- ・「只といふ町」↓「屋根裏の部屋」↓「たけくらべ」(第三回)
- ・「二十四五六」↓「青年士官」(第七回)
- ・「自啓録」↓「展覧会」↓「自啓録その他」↓「自啓録と手紙」(第九回)

第二回で「軍神の片影」を「軍神の話」に変えたのは、海軍兵学校時代の横山少佐の逸話を、より親しみやすく伝えようとした配慮であろう。また、小学校の同じクラスで、横山少佐と常に首席を争ったS・S子の話を伝える第三回は、「たけくらべ」以外の章題は、内容と合致しない。「屋根裏の部屋」が第八回で採用されることか

ら推して、当初考えられた内容が変更されたものと思われる。そして、第七回で「二十四五六」を「青年士官」に変えたのは、ひそかに別れを告げに帰郷した横山少佐の若さを、軍人として強調しようとしたものであろう。

自筆原稿と『海軍随筆』収録本文との異同は、「座談をお願いした。」↓「お集りを願つた。」(たけくらべ)、「山形屋デパート」↓「デパート」(西瓜)など数ヶ所に過ぎず、内容に関わる大きな変更はない。しかし、推敲段階での手入れは数多く見られる。

まず、横山少佐の形象について。兵学校時代の横山少佐の「声は可愛く」を「声は優しかつたが」(軍神の話)に改稿、昭和十五年の桜星会記念写真の「少佐は薩摩緋を着て、ニコくしてゐた。」を「少佐は薩摩緋を着て、坊主刈りで、一見、中学生のやうだつた。」(桜星会)に改稿するなど、親しみの持てる好青年として描こうとする推敲が行われている。「少佐は男権論者ではなかつたと思ふ。少佐の姉のうちには、教育家になつた人もある。」から、「少佐は女卑論者ではなかつたと思ふ。少佐は母親を限りなく尊敬してゐたし、また、姉のうちには、教鞭をとつたほど知識のある人もゐた。」(たけくらべ)へ、母親に対する尊敬を強調する方向への改稿も、横山少佐のやさしさを伝えようとする推敲だろう。横山少佐をモデルとした小説『海軍』の谷真人も、休暇で帰郷した折りに、

「お母はん、あたや、米の配達をしもすで」（風と波、二）と家業の手伝いを申し出るような母親思いの好青年として描かれている。

これら横山少佐の性格は、数々の関係者からの取材によって、しだいにその像が結ばれてきたのだろうが、岩田の取材態度は真摯なものだった。とりわけ、鹿児島島の横山家を訪れた際には、遺族の気持を乱さないように心を配っている。少佐の戦死が発表されてから約四十日後、横山家の前に立った岩田は、その古い商家の飾り窓に「今日の煙草売切れ申候」と書いた紙が、風に揺れてゐた」ことを目にする。後に「風に揺れてゐた」の箇所を「軍神の家として異様に、私の眼に映つた」（屋根裏の部屋）と改稿するほど、相次ぐ弔問客のため、日常生活にも支障をきたしている家族の様子に、強い印象を受けたのである。

「その時で四十日ほどの間、横山家では商売もできず、家族の人々に疲労の色があつた。」は、当初、「その時で四十日ほどの間、横山家の人々はどれだけお茶を汲み、どれだけお辞儀をされたかと、私はなんだか傷ましくなつてきた。」（同）と記されていたように、岩田は弔問客への対応に追われる遺族に厚い同情を抱いたのである。この頃、横山家をはじめ（九軍神）の生家には、東條英機首相や各地の青少年団など、多くの人々が訪れていた。それは、（九軍神）を顕彰することで、太平洋戦争遂行へ国民の意識を高めようとする

政策の一環でもあった。

たとえば、「母堂たか刀自」を、「どこか古武士の風格を偲はせる女丈夫」で「尊くも健気な軍国の母」、さらには「大日本婦人会員として銃後奉公への重き責務を忘れぬ寡黙実践の勤労愛好者」^④と、出来合いの言葉で祀り上げる『九軍神正伝』の記述をよそに、岩田は「平出大佐の特別攻撃隊の放送を聴いて、一滴の涙もこぼさなかつたといふのが、ウソとしか思へないやうな、平々凡々の母親の顔であり、態度であつた。」（同）と、親近感を込めて記している。青年士官を神格化し、（軍神を生んだ母）を必要以上に持ち上げる風潮に抗して、岩田は家族の人間性をみつめようとしているのである。

そんな岩田だから、鹿児島島のデパートで「横山少佐顕彰展覧会」が開催された時も、「デパートの催し物といふ点で、私はあまり興味を惹かれなかつたのだが、ともかく行つてご覧なさいと、薦める人があつたので、最終日に歩を向けた」（自啓録と手紙）と、あまり関心を示さない。この部分が原稿段階で抹消されたのも検閲への顧慮だろうか。それでも、岩田は展覧会から「意外なる大きな収穫」を得る。横山少佐が任務の直前に万年筆で『自啓録』に記したとされる、「初陣の感想」をガラスケース越しに読んで、岩田は「私は昔の戦記文学の、一頁をも読むやうな気持になつた。」という。

この部分も後に「少佐の絶筆中の絶筆に相違なかつた。」（同）と改

稿されてしまうが、岩田が「九軍神」の事績を基にして、家族愛や友情を大切にすると、温かく血のかよった人間の「文学」を描こうとしたことが、自筆原稿を読むことで確認できる。

しかし、時代は検閲が強化された戦時下である。原稿段階での推敲には、軍部への配慮が目立つ。「葉隠^{はしかん}」といふもの↓「葉隠^{はしかん}」の武士道（軍神の話）、「東郷元帥」といふ帝国海軍の基本精神」↓「東郷元帥」といふ帝国海軍の象徴的精神」（同）、「戦死をしたのは」↓「立派な戦死を遂げたのは」（青年士官）、「美しい運命に死んだ。」↓「美しい運命の下に散った。」（自啓録と手紙）等々、軍人の美化へ向かう改稿は枚挙に暇がない。

前に「宮廷注意」の朱印の件に触れたが、小説『海軍』の菊池配属将校のモデル坂口中佐との会談を終えた岩田が、「私はこの陸軍の一将校が、海軍の軍神を教へ子としたことを、めでたい事実として考へた。」と記した部分も、「私はこの陸軍の老将校が、海軍の若い軍神を教へ子としたことを、皇国のめでたい事実として考へざるをえなかつた。」（二中の先生）と改稿されている。「皇国」の語の付加はやはり検閲の影響と考えられる。

岩田は、終生、皇室への敬慕を抱いていた作家だが、出来合いの言葉を使いたくないリアルな感覚を備えていた。昭和十七年に行われた海軍報道部長平出英夫大佐との対談^⑤でも、平出が「天皇陛

下を離れての海軍はなく、（略）海に囲まれた日本を海軍が天皇陛下の御為に護る。」「吾々は陪臣ではなく、誰がなんと云つても天皇様直属なんです。」と、しきりに皇室を持ち出し、国粋主義を振り回すのに対し、岩田は「一時、兵学寮時代に、ドーグラス等が大勢やつて来た時に海軍が英国の制度を採用したといふのはどういふ気持なんでせうか？（略）英国風の祭日や休日があつたりなんかする。」と冷静に相対化している。このような岩田なればこそ、数々の検閲の制約を受けながらも、「九軍神」の神格化に汲々とするルポ類や国策協力文学と一線を画した、穏やかな小説『海軍』を著すことが出来たのであろう。

一一

岩田は、東京・鹿児島・呉で短期間に旺盛な取材活動を行った。その多くは関係者からの聞き書きであるために、具体的な内実はわかりにくい。しかし、ここに鹿児島での取材を裏付ける資料の一端になりそうな雑誌がある。「報国団雑誌」第三十三号へ軍神横山少佐記念号（昭17・7・31、鹿児島県立第二鹿児島中学校報国団）である。横山正治の母校「鹿児島二中」が編集・発行した特集号であるだけに、全国版のルポ類にないきめ細かさを感じられる。以下に概略を紹介したい。

「軍神横山少佐遺影」を巻頭に、グラビアが六頁。そこには、中学生時代の横山正治が写った昭和十年四月の「軍人志望者組写真」や、「二中尾上教諭宛ノ書翰（昭和十六年九月三十日）」など、恩師に宛てた書簡をはじめ、母校ならではの資料が掲載されている。

また、「昭和十七年三月 東條首相生家ニ於ケル英霊礼拝」「昭和十七年五月二十二日 七高校庭ニ於ケル鹿児島市市葬」など地元での追悼の様子を伝える写真もある。

本文頁では「横山少佐遺文集」「横山少佐日記抄」など横山正治の文章が収録されている。「遺文集」のひとつ「御親閲を拝受して（本校学友会雑誌より）」は、小説『海軍』でも引用されている。鹿児島地方行幸中の天皇に拝謁した時の印象を綴った作文だが、興味深いのは、たとえば「亦一歩々々に陛下の忠良なる臣民と為ります」と至尊の御前に誓ひつ、益々踏む足を強めて玉座の前を通過した。「という横山正治の原文を、岩田が谷真人の文章として『陛下の忠良なる軍人になります』と心に誓ひつ、玉座の前を通過した。」（軍人組、九）と書き変えていることである。『海軍』余話「自筆原稿に見られた「御写真」から「御英姿」への余儀ない変更と同様、戦中版『海軍』においても、岩田は「臣民」「至尊」など皇室に関わる極端な言葉を避けたいと考えたようである。

『日記抄』は、「少佐の兵学校生活中の中軸をなす昭和十三年―三

年時代の正月から四年時代の十二月まで―の日記の抄録」で、これも小説『海軍』の「真人の日記」の章に引用されている。取材先の鹿児島で厚遇を受けた岩田が、「横山少佐の兵学校の日記なんてものは、当時のジャーナリズムが垂涎しそうなものだったが、学校の先生が、ひそかに私に回してくれた。」（『特殊潜航艇』昭43・3）と述懐しているので、原物を手元に置いて作品を書いたと思われる。小説『海軍』の「真人の日記」と『報国団雑誌』掲載の「日記抄」との間に異同はあるが、「日記抄」が「校長先生自らの手に成るもの」と付記されている以上、筆写に際して整理が行われた可能性があり、両者を比較して岩田の独創を探ることはむづかしい。

ともあれ、岩田は事前に関係者の話を聞くとともに、「学友会雑誌」や横山正治の『日記』を借用し、小説『海軍』に活用したのである。本作執筆への強い意欲が窺われる。なお、この「報国団雑誌」は、小説『海軍』連載開始から数えて三十日後の発行であり、同作後半の資料となった可能性もあろう。

横山正治の文章は、他に、池田校長「横山正治君略伝」中に、『自啓録』の「初陣の感想」全文が収められている。ところが、架蔵雑誌ではその部分が墨で黒々と抹消されているので、判読できない。前に触れたように、『自啓録』は岩田がデパートの展覧会で目にした文書である。岩田も「その全文を引用することを許されない

のは、残念であるが、」（自啓録と手紙）と記しているように、当局からの規制があったらしい。「報国団雑誌」では、グラビアに掲げられた書簡の発信年月日も墨で抹消されているなど、戦時下の言論統制が目立つ。昭和十七年の時点で、地方の中学校が発行した「非売品^⑥」にまで当局の目が光っていたと見るべきか。もともと、印刷・製本後の抹消なので、事前検閲は比較的ゆるやかだったということになるのか。

以上紹介した横山正治の文章の他に、「報国団雑誌」には、小説『海軍』の登場人物のモデルたちも追悼文を寄せている。河田校長のモデル池田校長は「横山正治君略伝」を、軍人組の担任緒方先生のモデル尾上盛隆は「合同海軍葬儀に参列して」「軍人横山少佐を偲ぶ」を寄稿し、菊池配属将校のモデル坂口中佐は「書」を揮毫している。

なかでも、幼な馴染み牟田口隆夫のモデル肥後盛保（軍神と小学、中学、同級にして親友。現在日立製作所勤務、名古屋高工卒ーと注記）が届けた「旧友感想文」は興味深い。肥後は、「三月七日の朝刊にて九軍神の中に少佐の姿を拝しました時の感激実に筆にて述べる事は出来ません。」と公式的な賛美を示した後、「生涯の莫逆の友を失いました事は実に残念です。」と、友との別離を率直に悲しんでいる。そして、「学校の帰り等いつも一緒に（略）よく八幡小学

校の運動場に行つて野球、陸上競技等をして飛びまはつたものです」と中学生時代の思い出を語り、任官後も「私の下宿をたづねてくれました。そして一つのおとんの中で徹宵語り通した事も再三でありました。」と、横山正治との親交を懐かしむ。一つの蒲団で寝た話は、小説『海軍』『海軍画家』の章末で、真人と隆夫ふたりの隔ての無さを示す逸話として使われている。岩田は、自宅を訪ねてくれた肥後盛保から、これに類するさまざまな話を聞いて小説に活かしたのだろう。

「報国団雑誌」第三十三号（軍神横山少佐記念号）は、「軍神」に対する母校の反応や、地方での検閲の問題を考えさせるとともに、小説『海軍』の取材過程で、岩田が得たものを類推できる資料である。^⑦

三

小説『海軍』が四版を重ね、なお売れている頃、少女少女向きにリライトした『少国民版海軍』（昭18・10・5初版一萬部、昭19・2・20二刷三萬部、利根書房）が、石井鶴三の装幀で刊行された。小説『海軍』は「決して不必要に大きなポーズをとることなく」（前出「日本出版文化協会推薦之辞」）、（軍神）の生涯を描き、青春文学とも読める内容を持っていたが、『少国民版海軍』になると国

策協力色が濃くなってくる。

扉をめくると、まず、鹿児島東郷平八郎元帥の墓や、江田島の海軍兵学校の授業風景、練習艦の遠洋航海や真珠湾攻撃、さらには〈九軍神〉の海軍葬の様子など、グラビア十頁に亘って十六枚もの写真が掲載されている。おおむね作品の展開に沿った配列であり、年少の読者は、虚構の小説ではなく事実の記録として読むように誘導される。

次に、海軍大将末次信正と海軍報道部課長平出英夫、ふたりの「序」が並ぶ。末次は

少国民諸君に自覚して貰ひたいことは、第一に、忠君愛国は理屈や議論でなく、身を以て実践すべきものであること。第二に、軍人は天才児たるを要せず、心だに忠誠ならば、凡児も亦陛下の立派な軍人としてお役に立ち得ること。以上の二つは本篇の主人公眞人が身を以て示した皇軍の尊い伝統である。

と本書の価値を推薦する。同様に、平出も「これを読まれた少国民の胸の中に、きつと軍神に続かうといふ熱意が、もり上つて来るに違ひない、私はさう信じてある。」と述べ、少国民教育に資する書としての期待を滲ませている。

小説『海軍』では勝海舟筆海軍兵学校門標から採られていた題字が、『少国民版海軍』では山本五十六元帥の揮毫に改められたこと

と併せ、次世代の優秀な海軍軍人を生み出そうとする姿勢が顕著である。「作者の態度が極めて真剣であり、(略)些かたりとも自我を雑ふる余地なかりしは想像に難からざる所である。」という末次の言は、生徒の「自我」を封じる戦中教育をよく現している。「作者は実在と真実の前に仕えたのであります」(「原作者として」とする一方で、「あの小説には、全然ホントの部分と、全然ウソの部分がある」(『海軍』余話)と、虚構の大切さを表した岩田の姿勢から離れ、『少国民版海軍』はプロバガンダの色彩が強い。

リライトに岩田がどのくらい関与したかはわからない^⑤。しかし、戦後、『獅子文六全集』全十六巻・別巻一(昭43・5・20)昭45・9・20、朝日新聞社)刊行時に、「戦争中の行動を秘そうとする一人部の人々の考えを、私は正しいとは思わない」(『海軍』その他について)として、戦争中の文章を一卷に収めることを出版元に依頼した岩田の潔い態度を考えると、『全集』に収録されず、作者の言及もない『少国民版海軍』は、他者によるリライトと考えるのが自然であろう。

章題の異同では、少女少女にはむつかしいと判断してか、「兵学校論」が抹消されたほか、「修羅」(小説『海軍』)↓「隆夫の悩み」(『少国民版海軍』)、「霹靂」↓「雷」^⑥、と平易な言葉に置き換えられている。最終章「近頃の若い者」がそのものずばりの「軍神」に変

えられているのも、国策協力色を強めている。ここでは結末近くの「雷」「軍神」の章をとりあげて、『少国民版海軍』の形象を検討したい。

「万感胸に迫つて」（小説『海軍』）↓「胸がいつばいになつて」（『少国民版海軍』）、「雄大な希望を胎んだ新年が」↓「大きな希望に輝く新年が」、「卒然として」↓「ふと」等々、かみくだいた表現に直されているのは「少国民版」一般に見られることだが、大本営発表や谷真人の遺書は、原文のまま置かれている。また、「家な、無断で、出ツきました」（小説『海軍』）↓「兄さん、あたしは、黙つて家を出てきたのです」（『少国民版海軍』）、「汝^わや、朝飯は？」↓「おまへ、腹がへつたらう」等々、鹿児島方言は共通語に直されている。冒頭の章題「男ン子」が「男の子」に変えられていたように、これは少年少女の読みやすさを考慮して、最初から決められた編集方針だったろう。

内容に関わる変更には、隆夫の妹エダの形象がある。明確なモデルが存在せず、作者岩田が創造した代表的な人物エダは、小説『海軍』では、心ひそかに真人を恋慕う女性としてその魅力を放っている。胸の内を伝えることなく、真珠湾攻撃で最愛の人を失ったエダは、陰ながら真人の遺髪を迎えるために、ただひとりで上京する。葬儀でも「エダだけは、泣かなかつた。彼女は、土下座の膝をキチ

ンと揃へて、微動もせず、合掌してゐた。囁んだ唇は、震へてゐても、声も、涙も出さなかつた」（近頃の若い者、七）。ところが、『少国民版海軍』のエダは泣くのである。「エダも、泣いてゐた。彼女は、坐つた膝をキチンと揃へ、合掌しながら、肩を震はせてゐた」（軍神、三）。

そもそも小説『海軍』のエダは、上京した胸の内を兄隆夫にも洩らすことはなかつた。隆夫が「洋裁学校か、女子大へ入りたいんぢやらう」と、見当違いの忖度をするだけである。一方、『少国民版海軍』のエダは、「兄の親友の葬儀に間に合ふやうに、東京へ行つて、それから、兄に頼んで、東京で勉強できるやうに、両親に説いて貰はうと思つた。」と、隆夫に上京の理由を話す。そして、葬儀を拜んで涙して、心を入れ替えて帰郷を決意する。「あたしは、たゞ、自分が偉くなりたいばかりに、東京で勉強しようと思つたのが、恥かしくなつたのです」。小説『海軍』で大きな要素を占めていたエダの真人への慕情は、『少国民版海軍』では消されている。それに変わつて打ち出されたのは、エダに「鹿児島へ帰つて、すこしでも、家の手助けになること」が「よほど、立派なことだと、気がつきました」と語らせるがごとき、勉学よりも家庭を守るのが女性の本分であるという、女性の生き方であつた。まるで青春小説が修身の教科書に変質したような変貌ぶりである。

葬列を見送った隆夫に、「真人は、神様になつた。軍神になつた」と考えさせ、「もう、悲しくはなかつた。自分の親友が、それほど大きな光栄を担つたことが、シミジミと、嬉しかつた。」と実感させたことも含め、軍人の「序」で期待された、少国民教育に資する書としての役割を全うしている。これと比較する時、小説『海軍』の〈健全さ〉はより明確にならう。

四

昭和十八年十二月八日、太平洋戦争開戦二周年を記念して、松竹映画『海軍』が封切られた。「決戦第三年を迎へて一億に捧ぐ」(『朝日新聞』昭18・12・7)との惹句や、石川達三の『海軍』を見た。立派なものだ。緒戦の感激を新たにした。(『同』昭18・12・8)との推薦文を載せて、大々的に宣伝されたこの映画は、田坂具隆監督、沢村勉脚本、山内明・風見章子主演。海軍報道部企画・海軍省後援に加え、文部省の推薦を得た。

封切りに先立って、沢村勉「脚本『海軍』(昭18・11・1初版五千部、青山書院)が刊行されている。真人の乗った特殊潜航艇が真珠湾深く突入していく様子を、原作での〈隆夫の夢〉としてではなく、実景で描くことで宣伝臭が強くなっていることは旧稿でのべた。その他にも、「今朝の攻撃は(略)畏れ多いが陛下のお耳にも達し

てゐる筈だ」、「よし。では、皇居を遙拝する。」など、天皇を意識した表現が多く、結末には靖国神社が現れ、「十六弁菊花の御紋章、春光に燦と輝く。尽忠殉国の英魂を、こゝによみがへらせて、爛漫と匂ふ万葉の桜花。」が描かれる。そして、「益荒雄の行くとお道をゆききはめわが若人らつひにかへらず」と、〈九軍神〉に捧げた山本五十六の和歌が示される周到さだ。

この映画は、映画雑誌再統合の結果、新発足した「映画評論」第一巻第一号(昭19・1、日本映画出版)に、「映画『海軍』検討」と題して特輯が組まれた。津村秀夫「総論」、飯島正・熊谷久虎「脚色」、清水千代太・豊田四郎「演出」、田中敏男・島崎清彦「撮影」、以上、分野別に七本の批評が掲載されている。それほど大きな注目を集めたということだろう。ところが、その評判は芳しくない。「絶対的立場で検討すると明かに失敗(津村)であり、脚色は『焦点がはつきりしない。全体が散漫である』(飯島。演出の「態度および技術に錯誤」(清水)があり、撮影にも「夜景描写の不充分(略)模型の精密度不足」(島崎)が見られる。「映画『海軍』は恐らく何人が見ても、小説『海軍』が読者に与へたやうな国民的感激を与へることは出来ない」(清水)というのが大方の批評であつた。^⑩

映像を見ると、確かに平板な展開やテンポの遅さが目立ち、軍艦

などの特殊撮影は幼稚に見える。映画製作そのものへの批判ではないものの、太平洋戦争後半のこの時期に、映画批評が活きていたことは注目してよいだろう。なお、この映画は戦後アメリカ軍に接收され、後に返還されたが、結末の真珠湾攻撃の場面が欠けている。そのため、ここでのべた沢村勉脚本が、実際にどのように撮影されたかは確認できない。岩田の原作から離れた宣伝臭の強い映画であったが、軍部が期待した戦意昂揚の役割は、あまり果たせなかったようである。

昭和三十八年八月三十一日、東映映画『海軍』が封切られた。戦後のリメイクである。村山新治監督、新藤兼人脚本、北大路欣也・三田佳子主演。青少年映画審議会の推薦を受けた。「戦う太平洋の青春！へ若さいっぱい」北大路がたくまじき海の男に挑む栄光の大作」（『朝日新聞』昭和38・8・28夕刊）との惹句が示すように、「新人スター北大路を往年の海軍士官に仕立ててカッコいい姿をみせようとしたもの」と切り捨てることは簡単である。しかし、「原爆の子」（昭27・8）「さくら隊散る」（昭63・8）など、戦争の悲惨を告発する作品を発表しつづけた新藤兼人が脚本を担当していることは注目に値する。

新藤は戦時中、海軍軍人だったが、敗戦直後、復員してすぐにシナリオ『海軍』を書いた。後に雑誌「シナリオ」第六巻第一号（昭

24・10）に掲載された同作は、岩田豊雄の原作ではなく、新藤のオリジナル作品である。八月十五日前後の、海軍航空隊分隊内の弛緩や腐敗が綴られている。日常的に行われた部下いじめや上官の料亭通い、〈玉音放送〉を聴いてすぐ始まった物資の奪い合い等々、軍隊の混乱がこれでもかと描かれている。「命をさらして、実にバカバカしい日々を送った海軍の生活を、出来るだけ嘘のないやうに書いたつもりである。」と附記するように、新藤の軍隊に対する怨みは深い。

したがって、岩田豊雄の小説『海軍』を脚本化する際にも、太平洋戦争が美化されることはない。随所に「ニュースの目」（ニュースフィルム）を挿入し、日本が無謀な戦争に深入りしていく時代が描写される。その渦に巻き込まれた青年男女、真人・隆夫・エダの友情が話の中心である。「映画評論」第二十巻第八号（昭38・8）に掲載されたシナリオを読むと、原作にはない、呉の下宿での真人とエダのキスシーンがクライマックスとされている。「わたし、決心して出てきたんです、あなたの妻になるために出てきたんです」と愛を告白し、身体を投げ出そうとするエダをなだめ、「あなたは多くの青春のぜんぶだ、二人の青春を美しいものにしておこう」という言葉を残し、出征する真人。この後、真人は特殊潜航艇で自死し、ふたりが結ばれることはない。「青春の悲劇から、戦争に対す

る批判が行われている」^⑫ 映画作品といえよう。

同じ原作に、戦中には戦意昂揚映画として、戦後は戦争批判映画として、一八〇度異なる脚色が施される事例は、あまり他にないだろう。小説『海軍』が、それだけ深い奥行きを持っている証左である。

戦中のベストセラーとして多くの読者を獲得した小説『海軍』は、作者岩田豊雄の手を離れ、少国民向けに書き改められるとともに、映画・演劇^⑬など、さまざまなジャンルに展開した。「海軍」余話」自筆原稿にみられた岩田の比較的穏やかな姿勢は、戦時下の戦意昂揚政策に絡め取られる一方、戦後は新たな受容を生み出した。戦争と文学の問題を考えるひとつの指標となるだろう。

注

- ① 小説『海軍』は敗戦後、絶版。しかし、昭和三十三年五月二十五日、『現代国民文学全集 第一巻 獅子文六集』（角川書店）に収録され、二年後には単行本『海軍』（昭34・6・10、角川書店）として再刊された。その後、角川文庫や原書房百冊選書などを経て、『獅子文六全集 第十六巻』（昭43・7・20、朝日新聞社）に収録。平成十三年八月二十五日には中公文庫が刊行された。
- ② 田中勳儀「岩田豊雄『海軍』論」（『文林』17、昭57・12、松蔭女子学院大学）

- ③ 一月三日・六日・十一日は休載。なお初出紙「朝日新聞」と初刊本『海軍随筆』との間で、ほとんど異同はない。
- ④ 無署名「軍神横山少佐」（朝日新聞社編『特別攻撃隊九軍神正伝』所収、七〇頁、昭17・5・1、朝日新聞東京本社）
- ⑤ 平出英夫・岩田豊雄「対談」海軍」（『文芸』10・9、昭17・9）
- ⑥ 「報国団雑誌」第三十三号の奥付には、「鹿児島県特高課・鹿児島海軍人事部岡崎」昭和十七年七月三十一日発行（非売品）と記されている。
- ⑦ 九軍神の出身地では、それぞれ地元（英雄）を顕彰する書物が刊行された。林繁男「軍神稲垣兵曹長」（昭17・7・10、博通社へ名古屋）、安原万次郎「軍神片山兵曹長」（昭18・1・15、合同新聞社（岡山）など）。
- ⑧ 小説『海軍』初版の題字は普通の活字を使用。勝海舟の筆になるのは再版以降である。
- ⑨ たとえば、丹羽文雄『海戦』（昭17・12・25、中央公論社）をリライトした『小国民版ソロモン海戦』（昭18・4・20、室戸書房）の「はしがき」には、「友人牧尾善三君の協力を得たことが示されている。実際は、他者が書き直すのが一般的だったと思われる。
- ⑩ 映画雑誌の批評だけではなく、一般紙でも「力の配分を誤り形も整はず、散漫である。」（『Q』「新映画評」海軍 松竹作品」朝日新聞」昭18・12・7）と酷評されている。
- ⑪ 田中純一郎『日本映画発達史Ⅳ』第一六章「日本映画とテレビ、三八一頁（昭55・5・20、中央公論社）
- ⑫ 無署名「『海軍』村山新治作品」（『キネマ旬報』347、昭38・9・1）。ほかに、江藤文夫「日本映画批評」海軍」（『キネマ旬報』351、昭38・10・15）は、「時代にとれえられた青年たちの姿」が描かれたと評する。
- ⑬ 「昭和十八年八月一日、明治座に新生新派。歌舞伎座に旧派で、岩田

豊雄作『海軍』を、新派は川口松太郎、旧派は中井泰孝脚色で演じる」
（柳永二郎『木戸哀楽―新派九十年の歩み―「年表ほか」二三九頁、昭
52・5・25、読売新聞社）。紙幅の関係で、演劇化の問題は省略した。
別稿を期したい。

〔付記〕

『海軍』余話―自筆原稿の公開を、岩田敦夫氏にお許しいただいた。
厚くお礼申し上げます。

小説『海軍』および『海軍隨筆』を除き、本稿で引用した岩田豊雄の
文章は、『獅子文六全集』全十六巻・別巻一（昭43・5・20―昭45・
9・20、朝日新聞社）を底本とした。引用に際し、漢字は原則として新
字体に改め、ルビを省略した。